4 月 2 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　22：　1 – 22

「正しい人だった」

いよいよイエスの十字架への道行きは、最後の一週間を迎えました。

これまでイエスは、人間の弱さに徹底的に寄り添うために、敢えて悪魔の誘惑を受けられました(「イエスは、『「あなたの神である主を試してはならない」と言われている』とお答えになった。」ルカによる福音書 4:12)。「自分さえ良ければ」という次元に留まっている人々の間にもすでに神の国が来ていることを示されました(「しかし、……神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」ルカによる福音書 11:20)。これまでの自分から脱却して新しい自分となり、神に従う道を示してこられました(「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」ルカによる福音書 9:23)。「変わる」ことを恐れずに、一歩を踏み出していくこと、またその思いを神が必ず用いてくださることを体現されました(「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」ルカによる福音書 9:29)。そして、たとえ人々から棄てられたとしても神は決して離れず、神の栄光を表す者としてくださることを約束されてきました(「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。」ルカによる福音書 20:17)。

全ては、「自分さえ良ければ」ではなく、神の道を歩み通すことの大切さ、豊かさを示すためでした(「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」フィリピの信徒への手紙 2:6-8)。それは、イエスという特別な存在だけがその全てをなし得るのではなく、神が造られた全ての存在が、神と共にあり、神の思いを体現できることを示すためでもあります。

人は、神の言葉に聞き、その思いに応えていくことによって、イエスと同様に、神の栄光を表す器となっていくことができます(「主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。」イザヤ書 56:1)。もちろん、常に「強く」いられるわけではありません。弱さを覚える時には、神にすがっても良いのです(「主よ、あなただけは／わたしを遠く離れないでください。わたしの力の神よ／今すぐにわたしを助けてください。」詩編 22:20)。

なぜなら、神は決して見捨てることがないからです。また、見る人はその事実を決して見逃さないからです(「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」ルカによる福音書 23:41)。

「百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した」(ルカによる福音書 23:47)。見逃さないばかりか、神の存在を知らない人にさえ、その栄光は届くことを聖書は教えています。

神の正しさは、どのような時代、どのような場所であったとしても確実で、揺り動かされることはありません。だから私たちも今、この時代にあって、この場所で神の正義を実現することができます。そのために祈り、働くことができます。

もっとも、「自分さえ良ければ」が蔓延する今の社会にあって、神の「正しさ」を貫くことは容易ではないことは誰もが知っています。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」と夏目漱石が『それから』に書いたように。

それでも、神の正義を貫こうとする者にイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカによる福音書 23:43)と、救いを約束してくださいます。「完全でなくとも良い。自分を無にする必要も無い。その『あなた』のために今、私は十字架につけられているのだから」とのイエスの言葉が聞こえてきます。

だからこそ、私たちもその思いに応える「正しい人」でありたいと願うのです。私たちも今、自分にできる精一杯を貫きたいと、イエスと共に自分の十字架への新たな一歩を踏み出すのです。